

不況と戦争の時代（1931～1945）その9

《1936年、田園調布に治水記念碑建立、取水堰建設》

1936年（昭和11）は、多摩川改修（河口―二子）が完了し、治水記念碑が田園調布に建立されるとともに、田園調布取水堰が建設された年です。なお、直下流には、2年前に丸子橋が完成しています。

そもそも、なぜこの堰が建設されたのでしょうか。しかも、建設年次は、この付近から取水していた玉川水道株式会社が、東京都水道局に買収された翌年です。そこに潜む背景とは何か。

関東大震災の復興事業によって、多摩川から大量の砂利が採取されました。この影響で河床が著しく低下し、河口から13km地点の田園調布地点にも、海水が遡上してくるようになったと考えます。

つまり、水道の水源として適さなくなり、潮止堰が必要となります。玉川水道株式会社は、この建設費用に耐えられず、東京市水道局に合併される道を選んだと推察します。東京市は、大東京建設に叶うことから、玉川水道株式会社を吸収合併し、堰建設を選択したわけです。

なお、この堰は、高度成長期後半に泡まみれの画像がマスコミに取り上げられて、水質汚染の象徴となり、取水した水は、カシンベック病（注1）の嫌疑が掛けられて、1970年（昭和45）取水停止されました。現在は、工業用水源として取水しているのみです。

さて、当時、東京市（東京府）との水争いを演じた神奈川県は、1938年（昭和13）、相模ダムを造る相模川河水統制事業（注2）を県議会で可決し、1940年（昭和15）に着手。相模ダムは、戦後の1947年（昭和22）に完成しています。

また、江戸川においても、河水統制事業の一環で、国が事業主体となって、篠崎水閘門（注3）が建設されました。

この時期、首都圏の旺盛な水需要に対応するべく、小河内ダム、相模ダムが着工され、田園調布取水堰、篠崎水閘門が完成したのですね。

注1：満州の泥炭地の水を飲用する人々に広まった、骨の一部が肥大化する風土病。大田区の小学生から手の骨が肥大化する症例が発見され、田園調布取水堰から取水された水との関係が疑われましたが、原因は分かりませんでした。

注2：河水統制事業は、1925年（大正15）、内務省土木研究所長の物部長穂によって提唱されたもので、不況対策の一環で調査が始まり、1937年（昭和12）から64河川を対象に本格的調査がスタート。神奈川県は、全国の先陣を切って相模川河水統制事業に着手しました。河水統制事業は、戦後、河川総合開発事業に生まれ変わりました。

注3：江戸川は、本川は行徳堰で潮止めされていましたが、旧江戸川にはありませんでした。そこで、江戸川河水統制事業は、旧江戸川分派地点に篠崎水閘門を建設して、江戸川本川を淡水化して水資源を開発するとともに、洪水流下機能をアップする計画（江戸川改修増補計画）を持たせたものです。篠崎水閘門は、国直轄事業として1936年（昭和11）に着工され、1943年（昭和18）完成。

写真は、①多摩川治水記念碑（世田谷区の玉川村とプラス周辺の名所紹介 HP 掲載写真、碑の揮毫は、多摩川改修に携わった内務省技師辰馬鎌蔵）、②泡まみれの田園調布堰（図で見る環境白書1981年に掲載された写真、昭和52年頃）、③現在の田園調布堰（京浜河川事務所HP掲載写真）

①



②



③

